腹を立てた貧乏神　　山口県

とんとん、むかし、あったんとい

あるところに、たいへん貧乏なじいさんとばあさんが住んでいました。

年の瀬もおしつまったある晩のことです。ぼろぼろの着物を着たみすぼらしいおじいさんがやってきて、

「わしは、貧乏神だが、この寒空に、どこも泊めてくれるところがない。『貧乏神には用がない』、『貧乏神を泊めたら年を越せん』といって、追いはらわれてしまうんじゃ。おまけに、どこの家も、福の神を迎えるというので、家をきれいに掃除していて、入りにくうてかなわん。見れば、この家は、えらい荒れ果てて、まことに貧乏らしくて、わしが住み着くのにもってこいだ。来年はずっとこの家に住まわせてもらうから、明日の大晦日には、したくして来るぞ」といいました。

じいさんもばあさんもびっくりしましたが、

「わしとこは、もともと貧乏で、これ以上の貧乏にはなるまい。寒空に泊めてくれるところがないのは、なんぼかお困りだろうから、どうぞ、泊って行ってくれ」といいました。

「ほう、それはありがたい。それじゃ、明日の晩に泊まりに来るから、頼んだよ」

貧乏神は、喜んで帰っていきました。

つぎの日、じいさんは、ばあさんにいいました。

「なあ、ばあさんや。なんぼ貧乏神だといっても、神さまは神さまだ。今日は大晦日でもあるし、すすをはらって、ちょっとは家の中を片付けて、貧乏神さまをおむかえしようじゃないか」

すると、ばあさんも、

「ほんに、じいさんのいうとおりだ。うちには、神さまというものがいらっしゃったことがない。貧乏神でも神さまにはちがいない。そこらを掃除して、年越しそばなりとお供えしよう」といいました。

じいさんとばあさんは、家の中を片付けるやら、そばを打つやら、いそがしく働いて、貧乏神が来るのを待っていました。

晩になると、貧乏神が、

「さあさあ、泊めてもらいに来たぞ」と、うれしそうにやって来ました。ところが、家に入ってみると、きれいに掃除してあるし、神だなも作って明かりをともしてあるし、貧乏神は急にきげんが悪くなりました。

そして、大声で怒りだしました。

「おまえとこはきたなくて、わしにはもってこいのいいところだと思ってたのんであったのに、来てみれば、きれいに片づけて神だなまで作ってある。こんなところに泊まれはせん」

貧乏神は、さっさと外へ出ると、家の中に、小石やら、どろやら、木切れやらを、どんどん、どんどん投げこみました。じいさんとばあさんは、恐ろしくて、床にはいつくばってしまいました。

しばらくして、貧乏神が行ってしまったようすなので、ふたりは、ようやく顔をあげました。やれやれと思って、こわごわあたりを見まわすと、小石や泥や木切れだと思ったものが、これはまあどうしたことか、小判やら宝物やらに変わって、ぴかぴか光っていました。

じいさんとばあさんは、大喜びしました。

どんなに貧乏していても、真心でお客をむかえるのはいいことです。貧乏神も福の神も、もともとはひとつのものというわけです。

村上郁再話

資料『周防長門の昔話』松岡利夫編著／山口県教育委員会